

総論

読書と読書感想文 一書くことの意義と方法一



広島大学名誉教授
「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール中央審査委員長
田中宏幸

1 読書感想文指導の不振

読書感想文は本来、子供たちに「本を読む楽しさ」と「想いを文字にする楽しさ」を知ってもらうことを目指したものである。ところが、読書感想文は、子供たちからも教師からも敬遠されることが少なくない。ときには、読書嫌い・作文嫌いを産み出す元凶のように言われることさえある。

子供たちが読書感想文を嫌うのは何故か。「感想を書きたい本」が見つからない、「何のために、何を、どのように書くのか」がよく分からない、などが主な理由のようだ。

一方、教師が読書感想文の指導を避けたがるのは何故か。「事前指導の方法が明らかでない。長作文を読んで評価する負担が大きい。短期間では成果をあげにくい」などが主な理由だと思われる。

こうした不振要因を解消するにはどうすればよいのか。本稿では、「本との出会いをどのように作るか」という〈場の設定の問題〉と「読書感想文の書き方をどのように教えるか」という〈指導方法の問題〉の二つの側面から、具体的解決策を考えてみたい。

2 子供たちの読書状況

子供たちは本を読むのが嫌いなのだろうか。いや、決してそういうことはないだろう。「親と子の読書

活動等に関する調査」(平成16年度・図書館の情報拠点化に関する調査研究)によれば、本を読むことが「好き(46.5%)」、「どちらかというとき(39.1%)」という回答は全体の8割以上(85.6%)となっている。約20年前の調査結果であるが、時代が変わっても子供たちの「本を読むことが好きだ」という気持ちが失われているとは思えない。全国学校図書館協議会の「学校読書調査」(令和6年)においても、9割の小・中・高校生が「読書は大切だ」と答えているのである。

一方、「子供の読書活動推進に関する有識者会議論点まとめ」(令和4年12月)は、子供たちの読書量は増加しているが、不読率(1か月に本を1冊も読まない子供の割合)の改善には課題が残ると指摘している。平成13年度(2001)と比較すると、小学生の1か月間の平均読書冊数は6.2冊から13.2冊に増加し、中学生は2.1冊から4.7冊に増加したものの、令和4年度(2022)の不読率は、小学生6.4%、中学生18.6%、高校生51.1%であり、目標(小学生2%以下、中学生8%以下、高校生26%以下)に達していないというのである。また、本を読む時間が減少した一方で、漫画や雑誌を読む時間が増加したことが指摘されている。さらに、子供を取り巻く情報環境が大きく変化しており、今後いっそう読書離れが進むのではないかと懸念されている。

3 読書活動推進の手立て

こうした状況にあって、読書活動を推進して行くにはどうすればよいのか。目指すべき姿は、「子供が、好きな本を選択し、好きな時間に、好きな場所で、主体的に読書活動を行えるようにする」ことである。この理想形に近づくための手立てについて、選書・時間・場所・交流・記録の5観点から考えてみたい。

(1) 選書へのサポート(ガイダンス・レファランス)

「この本を読むように」と紹介したり、並行読書で教科書教材と関連する本を読ませたりすることも子供たちの力になることではあるが、自分で必要な本を選ぶことができるような力を養いたい。そのためにも、調べたくなるような話題や、ふだん親しみの少ない分野の書架に足を向けさせるような話題を提供して、本に関心を持たせたい。お薦め本のリーフレットの作成、読み聞かせやブックトークも積極的

に行きたい。「こども家庭庁」や「日本児童図書出版協会」等のWebサイトにアクセスして、「子どもたちに読んでほしい本」を検索させるのも、子供が読みたい本を見つけるきっかけとなる。

(2) 読書の時間と場所の確保

何よりも読書の機会を増やすことが大事である。テレビやスマホ等の電源を切り、静かな場所で読書が継続して行えるように環境を整えたい。全校一斉の読書活動(朝読)で読書習慣を身につけさせるのも効果がある。さらに家庭でも子供と一緒に読書を楽しむ時間(家読)を設けるように働きかけたい。

(3) 手を伸ばしたら本がある環境

広島県府中町立府中小学校では、校内7カ所に大小の特色ある図書コーナーを設置し、「手を伸ばしたら本がある環境」を作っている。子供司書の活動を促し、保護者をコーディネーターとして迎え、「心の居場所としての図書館」と「学習・情報センター」としての機能をもたせているのである。また、この図書コーナーを課題発見・解決学習の拠点として生かした授業実践も実施するなど、「学校まわりの図書館」という場を作ることによって読書活動を活発化し、不読率0%を達成するに至っている。

(4) 交流

読書会、ペア読書、ストーリーテリング、ブックトークなど、子供たちが面白かったところについて意見交換しあう場を作りたい。また、ゲーム感覚で行えるアニメーション、書評合戦(ビブリオバトル)などを楽しむことは、読む本の幅を広げたり、他者の異なる考えを知って改めて自分自身の考えを見つめ直したりすることに繋がっていく。

(5) 記録

各自の読書記録を残させたい。1日数行の「読書日記」でよい。「書名・著者・発行所・読んだページ数・ひと言感想」を記録しておくことで、自分の歩みを振り返ることができる。「読書貯金」や「読書マラソン」と名付けて数値目標を明確化すれば、意欲を喚起することになり、継続しやすい。

読書日記に慣れてきたら、月に数回は「読書ノート」を書かせたい。こちらには、「大意や要点・この本から学んだこと・疑問・感じたこと」も書き込むようにする。また、読書計画として「読みたい本」のリストを作成させるのも、読書意欲を高めるのに効

果がある。こうしたことの発展として、読書感想文を書かせるようにしたい。

4 読書感想文は何のために書くのか

子供たちから「読書感想文は何のために書くのですか」と問われたら、どう答えたらよいのだろうか。読書感想文を書く意義を改めて確認しておこう。

(1) 読書の魅力をいっそう深いものに

本は、私たちを異なる時代、文化、場所へと連れて行ってくれる。小説の世界に没頭したり、歴史書で過去の出来事を学んだり、科学書で未知の知識を得たりすることで、自分自身の視野を広げ、新たな世界を発見することができる。

その上で、読んだ後に感想文を書くことにすれば、その体験はもっと深く、もっと記憶に残るものになる。物語であれば、面白かったところ、感動した場面、分からなかったことなどを文章にすることで、頭の中が整理され、本の理解が深まる。作者が何を伝えたかったのか、登場人物はどんな気持ちだったのかをじっくり考える良い機会になる。

(2) かけがえのない成長の跡

私たちは、日常生活でも色々な出来事に接して色々と感じたり考えたりしている。しかし、どんなに強く感じたことでも、時の経過とともに薄れていき、やがて忘れてしまう。「今、ここで」感じていることは、書きとめておかなければ消えてしまう。

本を読んで感動したことも同じである。言葉にして書き残しておかなければ消えてしまう。小学生でなければ感じ取らなかったこと、十代の感性があればこそ受けとめられたことがあるはずである。書きとめておけば振り返ることもできる。感想文はかけがえのない自分の成長の足跡なのである。

(3) 読書感想文で育てられる力

育てられる力は、以下の6点に整理できる。

- ①読解力(文章の意図を深く読み解く力／登場人物の心情や作者の考えを推測する力／文章構造を理解し、要約する力)
- ②思考力(読んだ内容について自分の考えを深める力／自分の経験を結びつけ、新たな視点を得る力／読んだ内容を批判的に考え、意見をまとめる力)
- ③表現力(自分の考えを相手にわかりやすく伝える力／言葉を選んで、文章を構成する力／比喩や描

- 写などを使い、豊かな表現をする力)
- ④想像力・創造力(ストーリーの展開を想像したり、別の結末を考えたりする力／読んだ内容を基に、新しい物語を生み出す力)
- ⑤主体的に学ぶ力(積極的に本を選び、読書を楽しむ力／自分の考えを主体的に表現する力)
- ⑥豊かな人間性(自律しつつ他人と協調し、他者を思いやる心／感動する心／感性、倫理観、自立心、責任感、寛容さなど)
- 読書感想文を通して得られるこれらの力は、学校の勉強だけでなく、将来、大人になって社会に出た時にも必ず役に立つものとなる。文章を読んで理解する力、自分の考えをきちんと伝える力、そして色々なことを深く考える力は、どんな仕事をする上でも重要な力だからである。

5 読書感想文では何を書くのか

読書感想文では何を書くのか。この問いに「本を読んだ感想を自由に書けばよい」と答えたのでは、書くことを苦手とする子供は戸惑うばかりであろう。もっと焦点化して、具体的にアドバイスする必要がある。その方法として、ここでは三宅香帆(注)が勧める三つの手法を挙げておこう。

(1) 自分の変容を書く

三宅は、「読書感想文とは、『この本を読んで、私はこう変わりました』と言えればいいジャンルの作文」だと断言する。重要なのは、本を読んだ感想ではなく、この本を読んでどう成長したかという読書体験を書くことだというのである。

さらに選書にあたっては、「自分の嫌いなモノについて書いた本を選ぼう」と勧めている。本が苦手な子供は好きなジャンルの本を選びがちだが、それでは「この本が面白かった」で終わってしまう。嫌いなテーマを選べば、その本を読んで「嫌いだったモノが好きになった」という内容を、自分の体験も交えて容易に書けるようになるからである。異色の提案ではあるが、「自己の変容を書く」のには手軽で効果的な方法であると言えよう。

(2) 作品のテーマと構造を語る

課題図書が決まっている場合には、自己の変容体験を語ることにこだわらず、その本を自分なりにど

う読んだかを論じればよいと三宅は言う。「この本は〇〇とは何かを書いた話だ。それは〇〇と〇〇の対立(対比)によって描かれている」という構文を用いて、作品のテーマと構造について自分の考えを述べていくのである。この方法は、ロラン・バルトの「物語の構造分析」を踏まえたものである。「主人公が〇〇と出会って〇〇になる話」と一文要約して作品のプロットを捉えれば、あらすじをまとめることもでき、自分の解釈を述べやすくなるであろう。

(3) 語り方から作者の意図を探る

ノンフィクションの場合はどうするか。三宅は、「語り方に着目する」ことを勧めている。「ここは普通の本と語り方が違うな。面白いな」と思った点に注目し、「この本が〇〇という構成を取っているのは、〇〇というテーマを伝えたかったからだ」と詳しく書いていけばよいというのである。

確かに、これまでの「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクールの入選作にも「国語辞典の書き方の面白さ」について感想をまとめたものがあり、高く評価されたことがある。

「作品の構造や語り方に着目してテーマや意図に迫る」という方法は、高度な思考力を必要とするが、読書感想文は、「自分の変容や自己の体験を書くこと」ととどまらず、「本を読んで考えたことを自分の言葉で自由に書くことのできる場」だと受けとめて、是非挑戦してみたいものである。

6 読書感想文はどう書くか

(1) 文章構成モデル

具体的な書き方については、最近は、Webサイトで「読書感想文テンプレート」が紹介されるようになった。そこでは次のような構成例が挙げられている。

- ① この本を読むことになったきっかけ
- ② 本のあらすじ
- ③ 気になった箇所についての感想や体験談
- ④ 読む前と読んだ後の気持ちの変化
- ⑤ 今後に向けた抱負

この文章構成モデルには、読書感想文に書き込みたい要素が網羅されている。長文を書くことに慣れないうちは、この型に沿って書いていけばおのずか

らまとまった感想文ができあがることになる。作文が苦手な場合は、この型を利用するのも悪くない。

しかし、型にはめることが優先されて、誰が書いても同じようなありきたちの感想文になってしまう恐れがある。書き上げた達成感も希薄なものとなろう。型を活用しながらも、自分の感じたことや考えたことを大事にして、「自分の体験」を交えて、できるだけ具体的に述べるようにさせたい。また、文章の展開についても、「気になった箇所の引用」や「自分の変化」を先に述べることはできないかと工夫を凝らすように助言したい。

(2) 「題名」で読み手の興味を引きつける

作文を読む際、最初に目が行くのが題名である。題名が工夫されたものであれば、「どんな話だろう」「おもしろそうだな」と期待感を持つ。

「〇〇という本を読んで」という題ではなく、伝えたい内容を焦点化したり、文章中に使われている印象的な言葉を引用したりして、題名にするとよい。倒置法や体言止めや比喩法も使ってよい。題名が決まれば、書きたいことの中心も明確になってくる。

その際、題名と内容が一致していることが大切である。せっかくいい題名をつけても、内容と一致しない作文が時々ある。書き出す前に思いついた題は、あくまでも「仮の題」である。書き終えた後にもう一度「題」を見直すように指導したい。

(3) 「書き出し」と「結び」の工夫

①書き出しの工夫

読書感想文の場合は、ともすれば最後の方まで読み進めていかないと何をテーマに書いているのか分からない作文が多い。あらすじが長々と書き並べられ、やっと終わったかと思えば、「面白かったです」で終わってしまうことが少なくない。

文章構成に変化をつけるには、まず、書き出しをどうするかを考えていくとよい。書き出しと大きな流れが決まれば、筆が一気に進むようになる。「心に残った言葉の引用」や「いきなりテーマ紹介」といった書き出しは、伝えたいことの中心に直結するので、書くことの枠組み作りにも効果的である。

②結びの工夫

作文の審査会で、「この最後の文、惜しいですね」という会話が交わされることがある。要らない文が入っていたり、誰もが使うような陳腐な言葉で終

わっていたりしているのである。

大事なことは、「題名→書き出し→結び」がうまく繋がっていることである。例えば、次の作文例。

【題 名】 平和に向かうははじめの一步
 【書き出し】 「自分には何ができるのだろう」思わずそうつぶやいていた。
 【結 び】 「となりの人と手をつなぐこと」まずは、こんな一歩から踏み出してみたい。

【結び】の「こんな一歩」が、【題名】の「はじめの一步」と対応している。【書き出し】の「何ができるのだろう」という問いに対する答えにもなっている。これだけで、論の一貫した文章だと分かる。

(4) 推敲と添削と声かけ

書き終えたら、少し時間をおいて、第三者の目で読み直すことが大事である。誤字・脱字等の基本的な点検だけでなく、的確な言葉遣い・段落の繋がり・見出しの適切さ・考えの明確さなど、文章全体のまとまりをチェックすることも忘れてはならない。

適切な時期に添削や声かけをすることも子供たちの励みとなる。但し、赤ペンばかりだと自己を否定されたように感じる子供が生まれる恐れがある。

- ① 良いところを具体的に褒める。
- ② 一人の「読み手」としての受け止め方を伝える。
- ③ 改善点を見つけても、まず本人の思いを尋ねる。
- ④ 納得がいくまで書き直すことを促す。

こうした配慮が、子供たちを作文好きにして行くであろう。

7 読書活動の活性化を

読書感想文指導は読書指導そのものである。本を読んで感じたことや考えたことを、深く自分の内面と向き合い思索しながら、自分の持つ語彙力と表現力を使って自己表現する学習である。読書感想文に取り組むことで、本が好きになったり自分が変わったりできるようになってほしい。読書感想文が読書活動の活性化に生かされることを願ってやまない。

(注) 三宅香帆「もしプロの書評家为本気で読書感想文を書いたら」(東洋経済オンライン、2023年7月～9月、8回連載)